

世界が認めた歌声。
異彩を放つディーヴァが今年も魅せる

中村恵理 (ソプラノ)

Eri Nakamura, Soprano

英国ロイヤルオペラ、ウィーン国立歌劇場など、ヨーロッパを中心に名門歌劇場で圧倒的存在感を放つソプラノ・中村恵理のリサイタルを今年も開催。今回は、前半にイタリア歌曲を、後半には注目の気鋭テノール・工藤和真をゲストに迎え、プッチーニの歌劇から胸を打つ名曲の数々が披露される。自身初となるオール・イタリア語・プログラムのリサイタルに向けて、想いを語ってもらった。



昨年11月に浜離宮朝日ホールでおこなわれた中村恵理のリサイタルは衝撃的だった。全身全霊で歌い演じる中村のステージを聴いているうちに、彼女の描き出す世界を自分も生きているような思いに駆られたのだ。後に残るのは得難い体験をした、という記憶である。

「昨年のリサイタルは、おかげさまでご好評をいただきとても嬉しく思っています。私としても感触が良かったのは、マスネの《マノン》からの二重唱を（ゲストで出演した）テノールの工藤和真さんと、そして、その流れでプッチーニの《マノン・レスコー》を歌ったこと。その時に、『ああ、やはり自分は、役を生きていることが好きなのだ』と実感しました」

中村は来る12月3日（水）に再び浜離宮朝日ホールでリサイタルをおこなう。今回のプログラムはイタリア語の曲のみを歌う、中村にとって初めての試みだ。

特に後半はオール・プッチーニのことで、オペラ・ファンには嬉しい限り。

「私はこれまでリサイタルのレパートリーは多言語でしたし、今後の予定もまたドイツ語やフランス語の曲を歌うことを考えています。今回はチャレンジとしてあえてイタリア語のみでやってみようかなと。今、私がいただいているお仕事が、90%以上イタリア・オペラなんです。大きな役を歌った後に戻ってくるという意味で、イタリアの歌曲も大切にしています。

前半ではスカララッティ『すみれ』『私は心に感じる』から始まり、ガスパリーニ、チェスティーの曲を。イタリア古典歌曲は新鮮で難しいです。聴き馴染みが良くて素敵！と思って選曲させていただくのですが、歌うと『ああ、もう、難しい！』となります。『すみれ』は数学的というか、変拍子を感じさせる難しさがあります

し、『私は心に感じる』や、続くガスパリーニやチェスティーも大学生の時に勉強したはずなのですが、その時はきっと何も考えないで歌っていたと思うんです。それが今は『ああ、何でもないように跳躍が入っているのが尊いというか美しい！』と思いつつ、そのシンプルなのところが難しく感じられます」

古典歌曲の後には、プッチーニと同世代、もしくはその後の時代の作曲家の作品が歌われる。

「ドナウディはサロンで歌えるような美しいメロディの曲が揃っていて、前から取り組みたいと思っていました。マスカーニ、レオンカヴァッロはプッチーニの同時代人でもあり、後半のプッチーニが決まっていたのでヴェリズモの作曲家も取り上げたいなと。レスピーギはまた系統が少し違って、イタリアの哲学的で厳格な面が表れている、構築された世界です」

後半はプッチーニのオペラ・アリアのみで構成されている。中村は昨年のリサイタルの後、外国ではカナディアン・オペラ・カンパニーで《蝶々夫人》、イギリスでは《修道女アンジェリカ》を歌い高い評価を得ている。来年もアメリカのコロラド・オペラ他で《蝶々夫人》を歌う予定があり、プッチーニ歌いとして着実に地歩を固めている。まだ舞台で歌ったことはない、今回リサイタルで披露する《トスカ》に対する思いはどのようなだろう？

「前回、アンコールで《トスカ》から『歌に生き、愛に生き』を、お客様の前で初



ERI NAKAMURA Soprano Recital with KAZUMA KUDO

めて歌わせていただきました。今後も自分のレパートリーになることは多分ないと思うのですが、キャリアの終わりに自分がどうしても歌いたかったらオーケストラで、という思いはあります。《トスカ》にはデモーニッシュというか、悪魔的な誘惑があって、歌いたくなってしまうんですね。アリアもそうですが、今回歌わせていただく第一幕の二重唱も、抗えない魅力があるんです。トスカは敬虔な信心深い歌い手で、歌姫らしい強さを持っていますが、案外、普通感覚を持ったチャーミングなキャラクターだと思います。

中村はこの夏、ローマを訪れて《トスカ》の舞台になった場所を巡ったという。「そうなんです。突然、思い立って今年の夏はローマに行ってきました。ローマに観光で行ったことがなかったんです。最近気が付いたことなんですが、私はお仕事ではあちこちに行かせていただくけれど、基本的には家と仕事場の往復で終わってしまっていて、観光旅行というのをやったことがない。それで、行ってみたいと思い立ちました。オペラの現場ではイタリア語で歌い、同僚たちと会話しますが、それ以外の場所でイタリア語がちゃんと通じるかな、と心配でしたが、レストランでもちゃんとやっていて、すごく自信になりました（笑）」

《トスカ》は、ローマに実在する名所旧跡を舞台に作られたオペラとしても知られている。

「第一幕の舞台になったサンタンドレア・デッラ・ヴァッレ教会や、第三幕のサンタンジェロ城を訪れました。第二幕のファルネーゼ宮は見学を受け付けていないので入れませんでしたが。サンタンジェロ城に行った日は38℃位あってとて

も暑かったのですが、ちゃんと昇りました。トスカが最後に飛び降りる前に見た風景を見たいな、と思ったのです。すごく良かったです。ローマに観光に行っただけ良かったですし、楽しかったですね」

前回、マスネ《マノン》で二重唱を歌ったテノールの工藤和真は、今回は《トスカ》に加えて、プログラム最後の《蝶々夫人》第一幕の愛の二重唱に出演する。

「前回は“ゲスト”でしたが、今回は“with” 工藤和真さんなんです（笑）。工藤さんとは声が合うと思っています。何も言わなくてもスッとやってくださるので、音楽的なことを話し合いで決める必要もないんです。工藤さんはすでに《トスカ》のカヴァラドッシを歌っているの、お力をお借りして初めて第一幕の二重唱に挑戦します。《蝶々夫人》は逆に『ピンカートンも歌いたい』というお話をされていたので、『じゃあ私でよければぜひ』と」

今回のブッチーニはどれも場面としてドラマを感じさせる曲が多く、そこが魅力である。

「確かに、本当にこういうふうに住きたかった、と言えるようなものが揃った気がします。もちろんオペラとしては《トスカ》も《蝶々夫人》も辛い部分がありますが、ブッチーニのヒロインの持っている明るさや、可愛らしさの紹介にもなっているかなと。浜離宮朝日ホールは劇場と違ってステージと客席が近いですから、親密な空間で物語を共有できればと思います」



写真：2024年公演より ©松尾淳一郎

今回のリサイタルは日本語字幕も付いており、物語にどっぷり浸れそうだ。《ラ・ボエーム》の第三幕の名アリア『あなたの愛の呼ぶ声に』にもドラマ的に工夫がある。

「ピアノの木下志寿子さんに、《ラ・ボエーム》の第三幕の冒頭を少しアレンジして弾いていただいて、そのままミミが登場する場面へ、そしてアリアへと繋げられたらいいなと相談中です。そうすることによって作品の世界観が崩れないままで行けるかなと。木下さんはオペラを本当に愛していて、よくご存知なので、いつも助けていただいています。私がヨーロッパに行く前からの知り合いで、親しくさせていただいている数少ない方なので、ずっとこうやって一緒に音楽を志していけるのはすごくありがたいと思っています」

オペラの舞台以上にオペラ的なリサイタルになりそうだ。

「日本では最近、ヴェルディを歌わせていただくことが多かった気がします。ブッチーニは私の大切な作曲家の一人です。この機会にぜひまたブッチーニの世界を取り上げたいと思いました。たくさんの方に来ていただけたら、本当に嬉しいです」

取材・文：井内美香（オペラ・キュレーター）

中村恵理 ソプラノ・リサイタル with 工藤和真（テノール） ピアノ：木下志寿子

2025 12.3 日 19:00開演 浜離宮朝日ホール

全席指定（税込）：一般 ¥5,500 U30（30歳以下）¥2,000

スカララッティ：すみれ、私は心に感じる ガスバリーニ：あなたへの愛を捨てることは
チェスティ：歌劇《オロンテア》より「私の偶像である人のまわりに」
ドナウディ：いま緑の香りが戻り、ああ 私のいい人、いつまた君に逢えるだろうか
マスカーニ：花占い レスピーギ：霧 レオンカヴァッロ：朝の歌（マッティナータ）
ブッチーニ：歌劇《つばめ》より「お金のほかには何もないんだわ！～お嬢さん、愛が花ひらいたよ」
歌劇《トスカ》より 二重唱「マリオ！マリオ！……ここにいるよ！」、アリア「歌に生き、愛に生き」
歌劇《ラ・ボエーム》より「あなたの愛の呼ぶ声に」
歌劇《蝶々夫人》より 二重唱「夕暮れは迫り」

日本語
字幕付き



©FUKAMA SURVIZ

朝日ホール・チケットセンター
03-3267-9990（日・祝除く 10:00～18:00）

朝日ホール・チケットセンター ほか 各プレイガイドにて販売